

Hypo-Ellipticity の同値類について^(*)

東工大 理 平 良 和 昭

§ 0. 序

本稿の目的は、与えられた作用素の H.E.^(**) の Reduction
を、"H.E. の同値類" なる概念を導入して捉えることである。
この考えに従えば、どの作用素に Reduction するかということは、
同値類の代表元として何を選ぶかということに対応する
ことになる。

§ 1 では、H.E. の同値類なる概念を導入し、§ 2 では、
H.E. の Reduction を行ない、応用として、Grušin [1] の例につ
いて簡単にふれる。

(*) 1973年3月22日(木)には、"Generalized Poisson Operator と Grušin
の例について" と題して講演した。

(**) 以下、H.E. と略記して、『Hypo-Ellipticity』と『Hypo-Elliptic』
の二つの意味に使うが、混乱は生じない。

§ 1. H.E. の同値類

(函数空間) $\{\mathcal{E}^s\}_{s \in \mathbb{R}}$ は, Banach 空間の族で, $s_1 < s_2$ ならば, $\mathcal{E}^{s_2} \subset \mathcal{E}^{s_1}$ と仮定する。 $\mathcal{E}^{-\infty} = \bigcup_{s \in \mathbb{R}} \mathcal{E}^s$, $\mathcal{E}^{\infty} = \bigcap_{s \in \mathbb{R}} \mathcal{E}^s$ とおく。

以下で $\mathcal{F}^s, \mathcal{G}^s, \mathcal{H}^s$ などとも, 全て, この性質をもつものとする。

(正則性) 線型写像 $\mathcal{O}: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ ($s \in \mathbb{R}$) が, " σ で正則性をもつ" $\stackrel{\text{def.}}{\iff}$ 任意の $t < \sigma$ に対して, $e \in \mathcal{E}^t, \mathcal{O}e \in \mathcal{F}^{\sigma}$ ならば, $e \in \mathcal{E}^{\sigma}$ である。

特に, $t = -\infty, \sigma = \infty$ のとき, H.E. という。また, \mathcal{O} が σ で正則性をもつとき, $\mathcal{O} \approx 1$ とかく。

(正則同値) $\mathcal{O}: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ と $\mathcal{O}': \mathcal{G}^s \rightarrow \mathcal{H}^s$ が, " σ で正則同値である" $\stackrel{\text{def.}}{\iff}$ \mathcal{O} が σ で正則性をもつことと \mathcal{O}' が σ で正則性をもつことが同値である。すなわち, $\mathcal{O} \approx 1$ と $\mathcal{O}' \approx 1$ とが同値である。

\mathcal{O} と \mathcal{O}' が σ で正則同値のとき, $\mathcal{O} \approx_{\sigma} \mathcal{O}'$ とかく。

さて, 『この同値関係による \mathcal{O} の同値類の元としてどのようなものがとれるか』ということが問題になるが, これについては, 次の結果を得る。

基本定理 $\alpha: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$, $\beta: \mathcal{F}^s \rightarrow \mathcal{G}^s$ とする。

このとき, $\beta \approx 1$ ならば, $\alpha \approx \beta\alpha$ である。

特に, β が H.E. ならば, α が H.E. と $\beta\alpha$ が H.E. とは同値である。

(注意) この定理は, " $\beta \approx 1$ なる β を 左から作用 させる限り正則性は損なわれない" ことを意味している。

(基本定理の証明) i) $\alpha \approx 1$ とする。 $t < s$, $e \in \mathcal{E}^t$, $\beta\alpha e \in \mathcal{G}^s$ ならば, $\alpha: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ より $\alpha e \in \mathcal{F}^t$ であるから, $\alpha e \in \mathcal{F}^t$, $\beta\alpha e \in \mathcal{G}^s$ である。従って, $\beta \approx 1$ だから, $\alpha e \in \mathcal{F}^s$ 。ところが, $\alpha \approx 1$ としたから, $e \in \mathcal{E}^t$ $\alpha e \in \mathcal{F}^s$ より $e \in \mathcal{E}^s$ が従う。よって, $\alpha \approx 1$ が示された。

ii) $\beta\alpha \approx 1$ とする。 $t < s$, $e \in \mathcal{E}^t$, $\alpha e \in \mathcal{F}^s$ ならば, $\beta: \mathcal{F}^s \rightarrow \mathcal{G}^s$ より $\beta\alpha e \in \mathcal{G}^s$ であるから, $e \in \mathcal{E}^t$, $\beta\alpha e \in \mathcal{G}^s$ である。ところが, $\beta\alpha \approx 1$ としたから, $e \in \mathcal{E}^s$ が従う。よって, $\alpha \approx 1$ が示された。

(Q.E.D.)

§ 2. H.E. の Reduction

(函数空間) 以下 $r < s$ $\{Y_1^s\}_{s \in \mathbb{R}}$, $\{Y_2^s\}_{s \in \mathbb{R}}$, $\{Z_1^s\}_{s \in \mathbb{R}}$

$\{Z_2^s\}_{s \in R}$ は, 全て, §1 の $\{E^s\}_{s \in R}$ と同じ性質をもっているものとする.

(作用素) $E: Y_1^s \rightarrow Y_2^s$, $F: Y_1^s \rightarrow Z_2^s$, $H: Z_1^s \rightarrow Y_2^s$,
 $P: Z_2^s \rightarrow Y_1^s$, $Q: Z_2^s \rightarrow Z_1^s$ とする. このとき

$$\alpha = \begin{pmatrix} E, H \\ F, 0 \end{pmatrix}, \quad \beta = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix}, \quad \mathcal{E}^s = \begin{matrix} Y_1^s \\ \oplus \\ Z_1^s \end{matrix}, \quad \mathcal{F}^s = \begin{matrix} Y_2^s \\ \oplus \\ Z_2^s \end{matrix}, \quad \mathcal{G}^s = \begin{matrix} Y_1^s \\ \oplus \\ Z_2^s \end{matrix}$$

とおくと, $\alpha: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$, $\beta: \mathcal{G}^s \rightarrow \mathcal{E}^s$ である.

さて, ここで, α の正則性をもつことがわかっているとき, E に対する正則性 E , 何か他の作用素に対する正則性に Reduction できるか否かということを問題にしてみよう. これについてわれわれの得た結果は, 次の通りである.

主定理 次の二つの仮定をおく.

(仮定1) $\alpha = \begin{pmatrix} E, H \\ F, 0 \end{pmatrix}: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ が α で正則性をもつとする. すなわち, $\alpha \approx 1$.

(仮定2) α に対して, 次のような β が存在するとする:

$$\beta = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix}: \mathcal{G}^s \rightarrow \mathcal{E}^s \quad \text{で} \quad \alpha\beta \approx \gamma = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix}.$$

このとき, 次の結論を得る.

(結論) $E \approx Q$.

特に, α が H.E. ならば, E が H.E. と Q が H.E. とは同

値である。

証明のまゝに、補題を二つほどあげる。

補題1

$$C = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix} \underset{\sigma}{\sim} \begin{pmatrix} E, 0 \\ 0, 1 \end{pmatrix} = E$$

(証明) i) $C \underset{\sigma}{\sim} 1$ とする。 $t < \sigma$, $v \in Y_1^t$, $Fv \in Y_2^\sigma$
 ならば, $F: Y_1^s \rightarrow Z_2^s$ より

$$\begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix} = \mathcal{G}^t; \quad C \begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Fv \\ 0 \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_2^\sigma \\ \oplus \\ Z_2^\sigma \end{matrix} = \mathcal{F}^\sigma$$

$t = 3$ として, $C \underset{\sigma}{\sim} 1$ としたから

$$\begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} \in \mathcal{G}^\sigma = \begin{matrix} Y_1^\sigma \\ \oplus \\ Z_2^\sigma \end{matrix}. \quad \text{よって, } v \in Y_1^\sigma. \quad \text{すなわち, } E \underset{\sigma}{\sim} 1$$

が示された。

$$\text{ii) } E \underset{\sigma}{\sim} 1 \text{ とする。 } t < \sigma, \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in \mathcal{G}^t = \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix},$$

$$C \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Fv \\ Fv + w \end{pmatrix} \in \mathcal{F}^\sigma = \begin{matrix} Y_2^\sigma \\ \oplus \\ Z_2^\sigma \end{matrix} \quad \text{ならば, } v \in Y_1^t,$$

$Fv \in Y_2^\sigma$ 。 $t = 3$ として, $E \underset{\sigma}{\sim} 1$ としたから, $v \in Y_1^\sigma$ 。 従

って, $F: Y_1^s \rightarrow Z_2^s$ より, $Fv \in Z_2^\sigma$ 。 故に, $Fv + w \in Z_2^\sigma$

より $w = (w + Fv) - Fv \in Z_2^\sigma$ である。 よって,

$$\begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^\sigma \\ \oplus \\ Z_2^\sigma \end{matrix} = \mathcal{G}^\sigma. \quad \text{すなわち, } C \underset{\sigma}{\sim} 1 \text{ が示された。}$$

(Q.E.D.)

補題2

$$Q = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \underset{\sigma}{\sim} \begin{pmatrix} 1, 0 \\ 0, Q \end{pmatrix} = Q$$

(証明) i) $Q \underset{\sigma}{\sim} 1$ とする。 $t < \sigma$, $w \in Z_2^t, Qw \in Z_1^\sigma$ ならば, $P: Z_2^t \rightarrow Y_1^t$ より

$$\begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix} = g^t, \quad Q \begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ Qw \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^\sigma \\ \oplus \\ Z_1^\sigma \end{matrix} = \Sigma^\sigma.$$

$\therefore \exists z$, $Q \underset{\sigma}{\sim} 1$ としたから

$$\begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} \in g^\sigma = \begin{matrix} Y_1^\sigma \\ \oplus \\ Z_2^\sigma \end{matrix}. \quad \therefore \exists z, w \in Z_2^\sigma. \quad \exists \text{ なるゆゑ, } Q \underset{\sigma}{\sim} 1$$

が示された。

$$\text{ii) } Q \underset{\sigma}{\sim} 1 \text{ とする。 } t < \sigma, \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in g^t = \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix},$$

$$Q \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} v + Pw \\ Qw \end{pmatrix} \in \Sigma^\sigma = \begin{matrix} Y_1^\sigma \\ \oplus \\ Z_1^\sigma \end{matrix} \text{ ならば,}$$

$w \in Z_2^t, Qw \in Z_1^\sigma$. $\therefore \exists z$, $Q \underset{\sigma}{\sim} 1$ としたから,

$w \in Z_2^\sigma$. 従つて, $P: Z_2^t \rightarrow Y_1^t$ より, $Pw \in Y_1^t$. 故に,

$v + Pw \in Y_1^\sigma$ より $v = (v + Pw) - Pw \in Y_1^\sigma$. $\therefore \exists z$,

$$\begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^\sigma \\ \oplus \\ Z_2^\sigma \end{matrix} = g^\sigma. \quad \exists \text{ なるゆゑ, } Q \underset{\sigma}{\sim} 1 \text{ が示された.}$$

(Q.E.D.)

(主定理の証明) まず, 補題1 から

$$E = \begin{pmatrix} E, 0 \\ 0, 1 \end{pmatrix} \underset{\sigma}{\sim} C = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix}$$

である。さらに、(仮定2)から

$$C \underset{\sigma}{\sim} \alpha b$$

である。よって、(仮定1)から $\alpha \underset{\sigma}{\sim} 1$ であるから、

基本定理より

$$\alpha b \underset{\sigma}{\sim} b$$

となる。さらに、補題2より

$$b = \begin{pmatrix} 1, F \\ 0, Q \end{pmatrix} \underset{\sigma}{\sim} \begin{pmatrix} 1, 0 \\ 0, Q \end{pmatrix} = Q$$

である。従って、以上をまとめれば、

$$E \underset{\sigma}{\sim} Q$$

を得る。

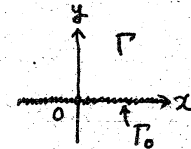
(Q.E.D.)

さて、主定理の応用として、次の例を考えよう：

例 (Grušin [1]) $P = 2$ 次元平面； $P_0 = \{(x, 0) : x \in \mathbb{R}\}$ ；

$$E = \frac{\partial^2}{\partial y^2} + y^2 \frac{\partial^2}{\partial x^2} - i \frac{\partial}{\partial x} + a y^2 \frac{\partial}{\partial x} \quad (a \text{ は複素定数}) ;$$

$F = P_0$ へのトレース；



$H =$ 次式で与えられる P_0 から P へのポテンシャル作用素：

$$H(\delta(x) \otimes \delta(y)) = \int e^{ix\xi} e^{-\frac{|y|^2}{2}} \hat{h}(\xi) d\xi ;$$

とすると、主定理の(仮定1)が満たされる(平良[2]の§4参照)。 P_0 上の擬微分作用素 Q が、(仮定2)を満たすのは、その symbol $q(\xi)$ ($\xi \in \mathbb{R}$) を、

$$q(\xi) \sim \begin{cases} -C|\xi| + \dots & \xi > 0 \\ -2\xi + C|\xi| + \dots & \xi < 0 \end{cases}$$

とすればよいことがわかる。ここで、 C は正の定数である。

従って、 $a \neq 0$ ならば、 Q は $\xi > 0$ については0階の、 $\xi < 0$ については1階の、楕円型擬微分作用素となるから、原点の近傍で H.E. である。(P_0 が1次元であることが本質的!) よって、主定理から次の系を得る。

系 $a \neq 0$ でない複素定数とする。このとき

$E = \frac{\partial^2}{\partial y^2} + y^2 \frac{\partial^2}{\partial x^2} - i \frac{\partial}{\partial x} + ay^2 \frac{\partial}{\partial x}$ は、原点の近傍で H.E. である。

(注意) $a = 0$ ならば、H.E. でない。実際、 l を適当な正の整数として、

$$u(x, y) = \int_0^\infty e^{ix\xi} \frac{e^{-\frac{y^2}{2}\xi}}{(1+\xi^2)^l} d\xi$$

とおけば、 $Eu = 0$ であるが、明らか

$$u(x, 0) = \int_0^\infty e^{ix\xi} \frac{1}{(1+\xi^2)^l} d\xi$$

は C^∞ ではない。

文 献

- [1] Grušin, On a class of elliptic pseudo-differential operators degenerate on a submanifold, Math. USSR Sb., 13 (1971), 155-185.
- [2] 平 良, Oblique 境界値問題について, 教理解析研究所講究録『函数解析的方法による偏微分方程式の研究』, 1973年1月22日~24日。